

学 界 消 息

史 学 研 究 会 関 係

史学研究会大会

は、中野文彦氏を中心とした地名学研究所員の一八ヶ年に及ぶ努力によつて集大成をみ、全国に例をみない地名大辞典が完成をみた。中野氏の炯眼はよく最近の改革を予想したとは想像し得ぬが、近來の農地改革・町村合併による地名の改廃を想起する時、本書が単に地理・歴史・國語・民俗の諸学徒の専有にきずものでなく、その利用活用の域を更に拡げるものであらう。(B5版 七五四頁 地図付 昭和三四年七月 京都伏見桃山 日本地名学研究所発行) (堀池 春峰)

検出し得る。統篇のみによつても充分に活用し得る事はこれによつても充分に認められよう。その成果は何といつても一同小字名を徹底的に抽出表記する事に成功している事で、町村合併が進行している今日、一応昭和三十四年一月現在迄を対象として取扱われているが、カイト(垣)の如き小字名は実に千に及ぶ存在が確認せられ、「〇〇カイト」と称するもの等は垣内の項と五十音順に配列された項の中にも抽出する等、誠に良心的な編輯をなされている。

大和を研究するものにとつて、地名は重要な位置を占める場合が甚だ多い。昨今迄は地名の検出に「大和志」が重要な地位をしめていた事も事実であらうが、本書の成るに及んで、その研究は更に拡大進捗する事も充分に察せられる。唯望蜀の言を呈するならば三字以上の町村大字名が二字に省略表記されている点で、巻頭につけられた奈良県市町村大字(町)一覧表に一応目を通す不便があるからである。勿論この様な不便は中野氏が辛苦せられに努力に比すれば、その労をいとう方が間違いであらう。

以上の様に正・統にわたる奈良県下の地名

細川邸で懇親会を開催した。第二日総会及び大会は、楽友会館講義室で開催。総会は宮崎理事長の挨拶にはじまり、有光理事より会務・会計の報告があり、報告内容は満場一致で承認された。次に講演会は早稲田大学教授鈴木成高氏、京都大学教授藤岡謙二郎氏により、次のテーマで行なわれた。

戦後史学と歴史主義 鈴木 成高氏
地籍図にみる歴史地理学の課題 藤岡謙二郎氏

史学研究会十二月例会

十二月五日(土)午後一時於楽友会館
京大イラン・アフガニスタン・パキスタン

學術調査隊に参加して

織田 武雄氏
羽田 明氏

四二巻四号既報の通り、右の學術調査に参加中であつた織田理事・羽田評議員は十一月初旬無事帰朝されたので、早速報告会を開催した。(スライド使用)

国 史 関 係

読史会創立五十年記念大会

本年は読史会創立以来五十年にあたり、次の諸記念事業が盛大に行われた。

十一月三日(祝)

物故会員追悼会 午前一〇時～一二時於百万遍蓮寺 五十年の間に物故された会員は約六〇名にのぼり、会員及び遺族多数の参加も得て、江藤徵英導師のもと、しめやかに追悼会を開催して故人の冥福を祈り、終了後遺族を囲んで座談会を開き故人をしのぶ一時を送った。

公開講演会 午後一時～四時

於毎日支局ホール

歴史と人間

奈良本辰也氏

黄金郷

小葉田 淳氏

西洋人のみた日本

牧 健二氏

(毎日新聞後援)

祝賀晩餐会 午後五時～八時 於楽友会館

西田直二郎名誉教授以下最近の卒業生にいたる約一〇〇名の会員及び三浦周行博士令息潤氏・喜田貞吉博士令息新六氏、平沢京大総長などの来賓を招いて盛大に開催した。

十一月四日 記念大会

(第一会場) 於文学部会議室(尊攘堂)

素戔鳴尊の神格と記紀神話の形成

日本の開国

調庸制度の一考察

聖武天皇と毘廬舎那仏

綜芸種智院の創建目的についての一考察

藤原時代の文化に於ける「心ばせ」について

金峰山経塚の教示

藤原鎌足と定恵の信仰について

里倉負名

中世寺院に於ける講について

発掘古銭よりみた中世阿波の通貨内容

和泉国大島庄の土地台帳について

地頭領主制について

赤松 俊秀

高尾 一彦

池田 源太

佐藤 虎雄

(第二会場)

於付属図書館講演室

長慶天皇についての研究

寛如時代の本尊について

鶴林寺文書について

群小寺院の中興と開山

浄土宗の場合

家礼の家について

柳子新論の思想的系譜について

本間家の古い計理組織と二・三の問題

近世の封建貢租に関する一考察

井上毅の思想について

近代思想史における政治と民族

―その明治的解決―

独逸美術史学界の動向について

近代日本歴史学の成立と京都史学派

―内田・三浦阿博士と史学史―

歴史編集法の反省

特別史料展覧 十一月一日～六日

京大付属図書館との共催のもとに、京大

史第一陳列室及び付属図書館陳列室の両

場にわたり、貴重史料の特別展覧を行な

った。

石沢 忠雄

酒井 澈

梅溪 昇

山中 桂二

中村 二柄

読史会五十年資料展 十一月三・四日

於陳列館演習室

五十年の歩みを回顧して、種々の写真・資料はじめ故人の遺影・著作などの展観を行なった。

「国史論集」「回顧五十年」の出版

記念論文集「国史論集」(別面紹介参照)

及び五十年史「回顧五十年」を刊行し、会員に配布した。なお「国史論集」は残部若干あり、定価三千円で会員外からの購入申込も受付けている。

日本史研究会大会

十一月二十一日(土)午後一時〜五時

個別研究発表

伊勢神宮の起源と渡会氏

岡田 精司

いわゆる「寄進地系荘園」の構造に関する一考察

永原 慶二

青木 茂

近世港町の社会構造

宮脇 俊二

武蔵国化政期農業の史的位相

宮脇 俊二

―篤農技術成立の前提的位相―

宮脇 俊二

石川県における自由民権運動の展開

福富 文哉

十一月二十二日(日)

(共通テーマ)「日本における社会構成の移行法則」

八・九世紀における奴隸制の諸条件

門脇 禎二

中世成立期の所有と経営について

戸田 芳実

農民層分解と地主制

高沢 裕一

国粹主義の成立

岩井 忠熊

東 洋 史 関 係

東洋史談話会大会 十一月三日(祝)

午前九時〜午後五時

人文科学研究所

敦煌の僧官について

竺沙 雅章

北魏孝文帝の政治

兼子 秀利

唐廐庫律について

中谷 英雄

中国古代の麻織物生産

佐藤 武敏

満文武皇帝実録の原典

今西 春秋

タムガ文書とニシャン文書

山田 信夫

明代松江棉業の基本構造

藤井 宏

明代海運の推移

星 斌夫

銀論について

増井 経夫

―清代洋銀の側面―

『維漢三年大并天下』瓦当を通じてみた

栗原 朋信

楚漢時代の形勢

貝塚 茂樹

春秋戦国時代の主従關係

貝塚 茂樹

旧制大学院会

十一月例会 十一月十四日(土)午後二時

楽友会館

宮崎先生の「科挙」について 中谷 英雄

徐中舒氏の「古代巴蜀初論」 狩野 直禎

十二月例会 十二月十二日(土)午後二時

楽友会館

杉村 莊三

西漢の社会と経済

杉村 莊三

東洋文化研究所交換研究会 十一月二〇日(金)

午後一時三〇分 人文科学研究所会議室

中国法制史の基本問題

仁井田 陞

東洋史談話会講演会

十二月十二日(土)午後二時 陳列館第二教室

教室

居庸関について

藤枝 晃

西 洋 史 関 係

西洋史読書会大会 十一月三日(祝)

午前九時半〜午後五時・京大楽友会館

ローマ共和政末期における民会について

森 祐三

アウグスティヌスにおける自然観

近山 金次

「フランク史」における封建社会の形成

坂田 正二

について

司教都市マインツにおける市民身分の成立について

沖 良平

プロイセン開拓期における土地授与の諸形式
山田 作男

十五・六世紀における西フランドル毛織物工業の一性格
川口 博

近代科学の成立とロンドン王立協会
山田 慶児

ベールン叛乱後のヴァージニア
石川 光世

人民党運動における労働同盟について
鹿嶋 邦子

ヘリゴランド・ザンデバル協定について
岡部 健彦

読書会例会 於西洋史研究室
十月十日(土)

ミケランジェロ
谷 泰

挫折の一典型
十月十七日(土)

中世末期ドイツにおける農民の階級闘争について
瀬原 義生

ナチス前夜の右翼思想
三宅 正樹

メラー・ファン・デン・ブルックと国際政治
十月三十一日(土)

サン・フランシスコ市の腐敗政治について
——一九世紀二十世紀の諸社会変化のケース・スタディとして——

志邨 晃佑

十一月二十八日(土)
イタリア中世都市の特質
会田 雄次

動の推進者
十二月十二日(土)

Tudor 絶対王制とギルドの動向
——議会立法を通じてみたギルド政策について——

十二月十九日(土)
三月革命期の自由主義ブルジョワジーによる憲法過程
田村 満穂

末川 清

末川 清

地 理 学 関 係

人文地理学会大会
十一月三日(祝)

於京都大学吉田分校
工業誘致現象について
杉野 秀一

松阪周辺における綿織物業に関する一考察
竹内 政子

わが国における毛糸紡績の立地について
伊藤 喜栄

名古屋市における陶器工業の展開
三浦 総子

鉄道輸送における近代化の問題
山崎 俊郎

瀬戸内の小型底曳網漁業
新宅 勇

干拓による海況漁況の変化とその漁業におよぼす影響について
河野 通博

岡山県錦海湾干拓に伴う漁業補償と漁民の職業について
由比浜省吾

組合自営の遠洋漁業
西田 彦一

役牛がもつ異質地域の結合
石田 寛

放牧と垣内
三重県北勢地区における桑園の衰退と分布について
大迫 輝通

川崎市域の農業の構造
野原 敏雄

北海道における農家と耕地
浮田 典良

由良川狭窄部の河畔地形と土地利用
籠瀬 良明

ソ連におけるコルホーズ集落形態の分析
中村 泰三

合猫里の位置と境域について
木村 宏

古代ローマにおける地理学の一考察
金子 廉

大家屋式村落の構造とその変化
佐々木高明

インドシナ半島における集落の構造
岩田 慶治

熱海旅館街の成立と現状
藤曲万寿男

宮島の観光地理的考察
野本 晃史

レクリエーションの地域的構造
小池 洋一

峠及び街道集落の変容過程

古地図より見た姫路城下町の地域構造

近世における村名の変遷

九十九里の集落移動論の批判

市街地率と市街地の実態について

選挙における地的制約選挙制度の矛盾とその地理的考察の有効性

木曲および真木曲地域の民家形式とその系統

南西諸島の住宅

人文地理学会第34回例会

十二月十二日 午後二時

北摂山地における地形上の二・三の問題

淡路島の人口地理

イラン・アフガニスタン・パキスタンの旅

織田 武雄

末尾 至行

田中 秀作

坂口 重雄

杉本 尚次

小川 徹

浅井 得一

清水馨八郎

桑原 公徳

稲見 悦治

近藤 忠

菊地 利夫

浅井 得一

清水馨八郎

桑原 公徳

稲見 悦治

近藤 忠

菊地 利夫

浅井 得一

清水馨八郎

桑原 公徳

稲見 悦治

近藤 忠

菊地 利夫

浅井 得一

清水馨八郎

桑原 公徳

稲見 悦治

近藤 忠

菊地 利夫

浅井 得一

清水馨八郎

桑原 公徳

稲見 悦治

近藤 忠

菊地 利夫

浅井 得一

清水馨八郎

桑原 公徳

稲見 悦治

近藤 忠

墳、天神山古墳——岡山市車塚古墳——岡山

大学考古学研究室——総社周辺古墳群（加茂

造山古墳、榊山古墳、千足古墳、蝙蝠塚古墳）

——国分尼寺址——吉備考古館——倉敷考古

館、美術館、民芸館——香川県国分尼寺址、

国分寺址——綾歌郡石船石棺、快天山古墳と

出土遺物（久万玉中学校）——三豊郡大野原

古墳群（平塚、角塚、枕貸塚）（六九頁へ）

投稿規定

◇資格 史学研究会々員に限る

◇原稿の長さ

◇研究論文 四百字詰五〇枚程度

◇研究ノート 四百字詰五〇枚以内

（以上には、四百字以内の要約二

通添付のこと）

◇学界動向 四百字詰三〇枚程度

◇書評 四百字詰二五枚以内

◇紹介 四百字詰三枚以内

◇その他 毎偶数月末

「史林」への投稿規定は右の通りです。

各位の積極的な御投稿をお待ちいたし

ます。

「史林」編集委員会

編集後記

一九六〇年の新春を迎えて、会員の各位はそれぞれ新しい抱負をもっておられることと
思います。史林でも、昨年は年間九〇〇ペー
ジの目標を達成することができたので、
本年は内容をいっそう充実させる目的で、研
究ノート欄を新設し、また本号には収載し得
ませんでしたが、次号より資料紹介欄を充実
することになりました。諸論文のテーマがま
ずまず専門化し細分化されてゆく現状のなか
で、皆様の優れた着眼と該博な知識とをもつ
て、個別的な問題を世界史的な問題に発展さ
せる場として、この両欄がお役に立てばと念
願する次第です。御投稿をお待ちしておりま
す。なお毎度のことながら、会費の完納をお
願いたします。（小野山節）

一九五九年（二月三日印刷） 定価一八〇円
一九六〇年（一月一日発行）
史林（第四三巻 第一号）

発行所 京都大学文学部内
京都大学文学部内

印刷所 京都府下京区西七条御所ノ内東町三九
中村印刷株式会社

学生実地指導見学旅行
十一月十六日——二〇日
岡山県伊部南大窯——和気郡花光寺山古

考古学関係

領主制の最も重要な存立基盤をなしたものである。

(三)別名の領主達は、領内の年貢收取を国衙に対して保障する責任をもたされその責任を遂行するため、領内の農業経営全般を実際に管理・統轄し、沙汰する権限・勸農権を獲得していた。彼等は領内に対するみずからの勸農権を相伝の「私領」となし、これを拠点にして領内農民を組織しつつ漸次在地領主制を展開させていった。

(四)別名の成立事情にはさまざまな経路が考えられるが、そ

の主な推進主体は国衙の在庁所に拠点をおく在庁官人達であつた。彼等はおのおのの職掌にしたがいつつ全体制的に旧来の郷を分割し、数多くの在庁別名を成立させていった。かくして彼等は在庁官人であるとともに一個の在地私領主としての性格を兼ね備えるにいたり、ここに国衙を中心に、一国的規模のたしかさで封建的構成への傾斜が開始されるにいたつた。

(一六〇頁より)

——讃岐宮保存遺物——坂出鎌田博物館——

城山——金山峠古墳、ハカリゴウロ石塚——

白峯寺——国分台無土器文化遺跡——石清尾

山古墳群(猫塚、姫塚、石船塚、鏡塚、北大

塚)——高松市すべり山出土弥生式土器(高

松市立美術館)。参加者は有光教授ほか八名。

京都府与謝郡加悦町字温江^{あつえ} 埴輪円筒棺の調

査

加悦町東方の丘陵の西斜面で埴輪円筒棺が発見されたので、京都府教育委員会の委嘱を

うけて、京都大学文学部西谷真治助手が一月二五、二六日に調査した。円筒棺が発見された位置には、墳丘らしいものもなく、また付近にも古墳はみあたらなかった。棺は朝顔形埴輪の口径部をとりさつたもので、長さ九二センチ、底部の径三五・三八センチある。両端に平石をたてて蓋をしていた。副葬品はまったく発見されていない。

京都市北区大宮町 瓦窯址の発見

大宮小学校の北側で、水路工事によって瓦窯址が破壊されつつあるという報知があつた